

生涯にわたって
社会のいたるところで学ぶための方法序説

地域固有の文化、アイデンティティとしての神楽

佐藤 克宏

提案・改めて文化財などから地域固有の事業をプログラムしてみませんか？

出会って、学んで、つながる地域大学「かく大学」から神楽の担い手が生まれた話

こんにちは。宮城県角田市生涯学習課の佐藤です。PBLや探究の要素を生涯学習に取り入れた「出会って、学んで、つながる地域大学」「かく大学」や地元角田高等学校の総合的な探究の時間に係る地域連携支援事業などを担当しています。

その「かく大学」にUターンで地元角田市に戻ってきた二十代の女性が参加してくれたのがきっかけで、「角田市民俗芸能大会」で神楽を見てみたら、これだ！と雷に打たれたようにいつの間にか担い手として入会していたのです。その民俗芸能大会は年に一度市内の数団体が伝統芸能（主に神楽）をステージで披露する催事。あとから聞いた話ですが、主催者側はまさか

若い女性から反応をもらえると想定外で驚いたと聞きました。その女性は今では笛も嗜み、地域のイベントや夏祭り、子供たちへの伝承活動など仕事の合間で一生懸命に取り組んでいます。

しかし一方で、この地域の伝統芸能は維持存続危うしと聞くことの方が多いかもかもしれません。現に失ってしまった文化や祭事もあるはず。高齢化や担い手不足、小中学生へのアプロー



チもなかなか繋がらない。大半の地域の伝統芸能は全国的に有名だったり、メディアで取り上げられているものでなければ同じ課題を抱えているのではないのでしょうか。

今だからこそ伝統芸能「神楽」にスポットライトをあててみる

このまちにしかないという地域固有の価値をどのようにしたら共有できるのでしょうか。前述した二〇代の若い女性が興味を持った事実にはその可能性がどのように感じます。コンビニやチェーン店などどこにでもあるものがこの街にはないから「何もない」と感じる若い人も多いはず。でも、見方や考え方を変えれば、伝統芸能などの地域固有の文化はここにしかない価値になり得る。しかし、それを住んでいる側は身近過ぎて、当たり前なものだからその価値や素晴らしさには気付きづらいようにも思えます。どのようにこの価値を見つけ出して、アウ

トプットすることが必要なのでしょうか。

改めて神楽を指定文化財として共有すること

角田市郷土資料館館長の齋藤彰裕さんに話を聞きました。

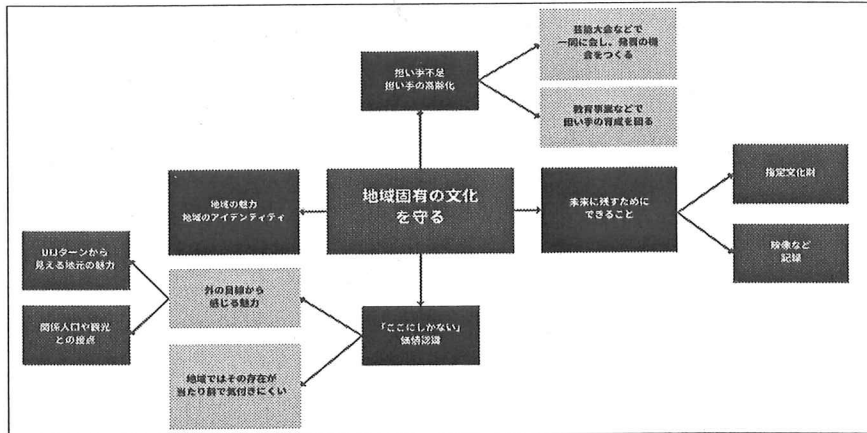
地域の神楽はもちろん、伝統ある祭事まで続けることが困難になりつつある。角田市でも同様。これをどのようにして守っていくか。まず初めに取り組んだのは



「角田市民俗芸能大会」だった。課題の一つに伝統芸能の団体間同士でつながりがほとんど無かった。このイベントを実施する過程でそれぞれの課題が共有されたり、助け合ったりするきっかけを作ることができた。イベントの他にも映像での記録にも取り組んでいる。ある地区で「田植え踊り」を復活させる動きがあった際に、大変な苦勞があった。万が一途絶えてしまうことになってしまったも未来に復元できるような形で残していきたい。角田市の各団体で活動されている方々には熱量がある。その想いを大切につないでいくために、歴史ある神楽に対して文化財の指定をした。このことで地域の財産として市内外の方々にも知ってもらえるきっかけになってほしい。引き続きイベントや記録などを行なっていくが、どこまでいってもそこに関わる「人」が大切だと思っている。文化財としてさらにやれることがないか模索していきたい。

神楽が地域アイデンティティとしてつないでいく未来

受け継がれてきた連続性と自分が結びついた時に、それはきつと誇りや尊厳につながっていくのではないのでしょうか。それには改めて「憧れ」をデザイン



し直し、時代に合わせた見せ方や在り方が必要なのでしょう。それを見出していく過程には、これから求められている学びがあるように思います。地域の未来において、その形はもしかしたら変わってしまっているかもしれないけれども、歴史をつなげてきた神楽を含む地域固有の文化の本質から、新しい価値を見出していく見方が重要だと感じます。皆様の街ではどのような地域固有の文化を学びに変えていますか？もしかしたら誰かに見つけてもらうのを待っている文化がまだまだあるのかもしれない。

次号は札幌市生涯学習センターからお送りする予定です。お楽しみにください。

宮城県角田市教育委員会生涯学習課主査（社会教育主事）
佐藤 克宏
連絡先： syoungaku@city.kakuda.lg.jp